

ヴァルネラブルな状態にある人の意向確認のあり方

－ 生活体験に着眼したアセスメントの視点 －

○ 沖縄大学 玉木千賀子 (6065)

[キーワード] ヴァルネラビリティ, 意向確認, 生活体験

1. 研究目的

本研究の目的は、社会生活に脆弱性をもち、福祉サービスやソーシャルワークの支援に対する意向確認が困難なヴァルネラブルな状態にある人に対するアセスメントの視点を考察することである。

ヴァルネラブルな状態にある人の意向確認のあり方に焦点化した主な理由は次の3点である。1点目に、ヴァルネラブルな状態にある人の存在は高度経済成長期に既に指摘されていたが、これまでに支援のあり方が十分には検討されてこなかったという点である。それは、生活上の課題への対処に困難が生じているものの、言語があることから支援の必要性が認識されにくく、措置方式および契約方式を主な手段とする社会福祉の支援システムでは十分にその支援のあり方が取り上げられてこなかったためであると考えられる。2点目に、ソーシャルワーク研究においては、被支援者像を自己決定が可能な人に定置し、理論の蓄積が取り組まれてきたことから、意向の形成・表出、言い換えれば自己決定が困難な人のソーシャルワークのあり方の検討が十分であるとはいえず、それらの人々の意向確認の研究に取り組む必要があると考えたためである。これまで、重度の心身障害、知的障害、認知症の状態にある人の意向の形成・表出の支援については実践的な研究がおこなわれてきているが、社会的な要因によって意向の形成・表出が困難な状況にある人の意向確認のあり方についての研究は乏しく、それらの人々に焦点を当てた支援のあり方の検討が重要であると考えた。3点目には、意向の形成・表出とは福祉サービスやソーシャルワークの支援を利用する場合のみならず、人が自らの望む生活を獲得するために欠かすことができない、生きる力であると考えられるためである。自分にとっての快さ・喜びを認識し、それを探求・発展させ、他者との関わりを通して発揮することを可能にするための力の形成は、個々の人間の幸福の実現に結びつくと考えられる。これらが制限されているヴァルネラブルな状態にある人に焦点化し、意向確認の支援のあり方を検討することは、人を尊厳するというソーシャルワークの価値の具現化という意味をもつものであると考える。

2. 研究の視点および方法

発表者はこれまでの研究において、①意向の形成・表出には、言語表現化がとりわけ重要な意味をもち、言語表現化には、「感情の認識と感情の言語表現」、「事象の認識と事象の言語表現」、「他者との交流に必要な語彙の認識とその表現」、これら3つの言語表現を包含

する「自分の気持ちを表現するための言語の認識とその表現」の達成が必要とされる、②前述した言語の認識とその表現が達成されていない場合に様々な生活のしづらさ、すなわちヴァルネラヴィリティが生じる、③言語の認識とその表現の達成には、それを可能にするための生活体験が関係している、ことを確認した。

これらの結果を踏まえ、ヴァルネラブルな状態にある人の意向確認には、生活体験を確認することによって言語表現化の状況を捉え、個々の言語表現化の未達成を補うことを念頭においた相談面接、言語表現化の促進を視野に入れた支援計画が必要であるという視点に基づき、本報告では、どのような具体的生活体験に着眼し、福祉サービス・ソーシャルワークの支援を必要としている人の言語表現化の未達成の状況を捉えるのかという点に関する検討結果を提示する。研究方法は、ヴァルネラヴィリティに関する先行研究、調査報告等を用いた文献調査である。

3. 倫理的配慮

文献調査における先行研究の検討、他説の引用等の取り扱いについては、日本社会福祉学会研究倫理指針の遵守義務および引用の指針に関する内容に基づいておこなう。

4. 研究結果

感情の認識と言語表現化には、他者と感情や感動を分かち合う、ひとつのことに熱中して取り組むなど、快・不快、喜怒哀楽を表出・共有する体験、事象の認識とその言語表現化には、読み聞かせをしてもらう、食材や段取りを考えたうえでの調理の体験など知的世界の拡大や生活技術を培う体験、他者との交流に必要な語彙の認識と言語表現化には、自分の存在をありのままに受け止めてもらえる人との関わり、親身に手助けをしてくれる人との出会いの体験など、自己の存在が認められる体験が考えられた。

これらの生活体験に着眼して支援を必要としている人の語りを捉えることによって、意向の確認が困難な人に対する、意向の形成・表出の困難の背景にある要因の分析、それに基づいた支援方策の検討が可能になると考えられる。

5. 考察

日本のソーシャルワークは欧米のソーシャルワーク理論を導入し研究が蓄積され、実践においては社会福祉の制度・サービスの枠組みの下で多くの部分の実践がおこなわれてきた。それは、ソーシャルワークの発展と社会的な定着の促進に作用したという側面がある一方で、人々の生活の現実からソーシャルワークのあり方を問うという視点を乏しくさせたという側面があるのではないだろうか。人々の生活に着眼し、困難の解消・軽減・予防に働きかけるのがソーシャルワークの役割であるならば、取り巻く環境との関わりの状況、すなわち生活体験が生きるために必要とされる力の形成にどのような影響を与えているのかという点を捉え、豊かな生活体験を培うための場や機会の醸成に向けたシステムづくりと支援機能の検討がソーシャルワークに求められているのではないだろうか。